

---

# 東方錬術録

璃燐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方錬術録

### 【コード】

N9956L

### 【作者名】

璃燐

### 【あらすじ】

普通の大学生の霧島 竜耶は一人で実験中に爆発事故で、幻想郷に飛ばされてしまう物語である。

東方二次創作です。上手く書けるよう頑張っていきます。

プロローグ・日常の終わりと幻想の始まり（前書き）

プロローグですけど、何気に長い？

そんな感じで、幻想スタート！！

## プロローグ：日常の終わりと幻想の始まり

ジリリリリ〜と静かな空間に鳴り響く音。そう、目覚まし時計の音だ。

俺は時計を止めると、再び布団の中に潜った。

何故起きないかって？あの時計は本々俺の物じゃないし。

それに、俺は寝たいから寝るだけだが、その願いはいつも叶わない。

タタタタタタつと足音が聞こえ、階段を上って俺の部屋に向かって来て

勢いよく、バン！つと扉を開ける。

「先輩、朝ですよ！起きてください！！」つと元気な少女の音が聞こえてくる。「

「あと……………」

「ご？（これは、お約束の5分でしょうか？）」と緑色の髪に蛇と蛙の髪飾りを付けた少女が疑問に思いながら聞いてくる。

「あと……………」  
「5時間……………」と俺は寝ぼけながら答えると、少女はズッコケた。

「長すぎですよ！？」少女は身体を起こしながら、ツッコミを入れた。

「くかあ~~~~」

「はあ~~~~、ほら先輩、いい加減起きて下さい。」少女は、俺から布団を剥そうとするが全く持って剥れない。

「もう~~~~。そうだ！そんなに抵抗するならこっちだつて。」もぞもぞつと少女は、布団の中へ入り込み。そして俺の背中に柔らかい感触が当たると同時に、俺は布団から飛び起きた。

「はあはあ~~~~早苗ちゃん。君は一体何する気だよ!?」と俺は焦りながら言つと

「竜耶先輩が起きないのが悪いんですよ？まあ私も満更じゃないんですが。(ぼそ)」

竜耶Side

そう、俺の名前は霧島きりしま 竜耶りゅうや。普通の大学2年生だがあらゆる武術や剣術等に精通しており、頭も良い。1年前に大学を卒業するだけの単位を獲得しているので行くも行かないも自由なのである。因みに、大学の講師達からも了承は得ている。

次に、俺を起こしに来た少女の名前は、東風谷 早苗と言つとある場所の高校の3年生で俺より2つ年下の後輩で、俺が中学3年の時に、不良に絡まれてい

た所を助けた事で

俺に懐き、それ以来、家に遊びに着たり、時々、朝食を作ってはこ  
うして俺を起こしに来る。

「さあ先輩、早く朝食にしましょう？せつかくの汁物が冷めてしま  
いますよ？」

「俺の朝食は、普段はトーストとコーヒー（ブラック）で済まして  
るんだが？」

「そんな、偏った食事だと朝から元気出ませんよ？其れに早くしな  
いと大学に遅れますよ？」

私だつて、学校有るんですから。」

「いや・・・俺は去年に単位は十分取ってるから遅刻なんて無い  
し、行くも行かないも  
大抵は自由なんだが？」

「だめです！先輩がちゃんと登校してくれないと私が、先輩にお昼  
のお弁当届けられない  
じゃないですか！」

「どんな、理屈だよ・・・それ・・・」と俺は、手で顔  
を伏せながらガツクリ。  
仕方ないため、俺はリビングで早苗ちゃんの作った朝食を食べに向  
かった。

「うん。何だかんだ言うものの、やっぱり早苗ちゃんの料理は美味  
しいな。」

俺は、微笑みながら穏やかな表情で、早苗ちゃんの料理を評価する。

早苗ちゃんは、俺の顔を見ると何故か、顔が少し赤く火照ったような感じなのは  
俺の気のせいだろうか？

「そ、そんなあゝ、もう先輩たらあゝ寝たつて何も出ませんよ？」  
と話し込んでた

俺はふつと時計を見る。．．．．．7時半？

確か高校は8時くらいからHRだったはずだ？と言う事は早苗ちゃんの今の状況は  
非常に不味いのでは？

「なあ、早苗ちゃん。」

「はい？何ですか先輩？」

「こんなにゆっくりしてるけど、時間は大丈夫なのか？」

「へ？時間？」と早苗ちゃんは不意に時計を見た．．．．．そして  
一気に顔が真っ青に変わった

ああ．．．．．これは、完全に忘れてたな。

「あ．．．．ああああ！？や、やば！？もうー！どうして教えてくれ無かつたんですか！？」

と急いで自分の朝食を、口へ放り込み凄まじい勢いで食べ終える．．．  
．．．．．  
そして、学生鞆を持って学校に直行してしまった．．．．．

「はあゝゝ、じゃあ俺も、ぼちぼち行くとしますかね？」俺は急ぐ  
ことなく朝食を食べ終え

気が進まないが、大学へと向かった。

暫くして、大学に着いた俺は教室に向かった。既に室内には大勢の生徒が集まって

俺も適当な席に座た。

はあく、やはり無駄に長いな、講師の話は。良く喋るが俺は目を瞑り睡眠を貪っていた。

暫くの間、眠っていたら丁度10時半くらいか？俺は席を立ち、自分の研究室へ向かった。

だって、暇なんだもん。

で、俺は何をしているのかって？もち実験中だ！

目の前のテーブルには、無数の試験管やビーカーにフラスコなどの中に

様々な色の薬品が入ってる。

「えーと、これとこれを混ぜて、あれとそれをこのビーカーに入れてそれから……」

俺は手馴れたように様々な薬品を混ぜまくる。一様この部屋にある薬品には

爆発性の物が入ってはいないはずだ。

薬品を混ぜて失敗したとしても、ポンつと音が鳴るで、被害は全くもって皆無だ。

実験を始めてから、1時間が経とうとしていた。そうもつじき昼間だが

そんな事お構いなしに、俺は実験を続ける。

さて、大抵の薬品を混ぜ合わせて容器に入ってる液体は残り2つになった。

「ふむ？何時もなら、ポンっと音くらいなるはずだが、如何してだ？  
もしかして上手く行ってるのか？適当に組み合わせただけなん  
だがなあ？」

そして俺は、残りの2つを持ち少し大きめのビーカーに、ゆっくり  
と注いでいく。

「うーん？何やら変わった色になったが・・・反応が無いな？失  
敗したか？」

そう思い、それを放置して後片付けしようとしたら

先ほどの薬品が、光り出して、その光は次第に強くなり俺は眩しさ  
の腕で顔を塞いだ  
次の瞬間。

ドガーーーーーン

その爆音と共に、俺の意識はそこで途切れた。

早苗 Side

今、私は先輩にお昼のお弁当を、届けに大学に向かってます。

え？学校は如何したの？って？

実は今日、午前中で授業が終わったので、今、駆け出して移動中です。

「あ！見えてきた！」そして私は、門の受付で手続きを取っている  
最中に

ドガーーーーーン

「ひゃあ!？何ですか、一体!？」私は、爆音の方向を向いた場所は先輩が実験する時に使ってる部屋だったので。

私は、胸騒ぎがしました……。そして、手続きを取らずに私はその場所に向かって走り出していた……。

「うそ……。なに……。これ？」私が見た場所は、部屋の殆んどが焼け焦げた真っ黒に染まっていた……。

「せつ先輩!」私は、その部屋に入ろうとしたが

「コラ、君危ないぞ!？さあ、戻るんだ!」

「はっ放して、先輩が!竜耶先輩が!？」私は、必死にもがいて、先輩を探そうとしましたが、数人の警備員に押さえられて、探すことが出来なかった……。

先輩を探せなかった私は、そのまま家に帰宅しリビングに向かって二人の女性がいました。

「ああ、早苗お帰り。お邪魔してるよ?」

「ケロケロ!早苗おかえり〜!」

一人は、背中に注連縄を背負った大人の女性は八坂 神奈子と言って私が崇める神様の一人である。守矢神社に祀られている神様。

もう一人は、幼い容姿で蛙のような仕草と帽子を被った少女は、洩矢 諏訪子と言って

私が崇めるもう一人の神様で、土着神の頂点と呼ばれている。

「神奈子様……諏訪子様……」私は涙を流しながら、二人の名前を呼んだ。

「ん？どうしたんだい、早苗？それに何で泣いて？」

「早苗、もしかして、苛められたとか？」

「実は……」私はお二人に今日の出来事を話した。

暫くして話が終わると

「つまり、早苗が慕ってる竜耶って先輩さんが実験中の爆破事故で亡くなったと？」

「でも、話聞いているとさあ、その竜耶って人は爆発する様な薬品は殆んど

使わないんだよね？そして、それが何故か爆発して、研究室が真っ黒に焼け焦げてたと？」

「はい……」

「ねね、神奈子？私が様子見に行っても良いかな？」

「いや、私も行こう。私達の姿は、早苗か、特別な能力持ってない

限り見えないからね。」

「じゃあ、今から行くのか？」

「ああ、それに現場に何にか有るかも知んないからね？」

「あの、私は……」私はじっとして居られなかった。

「早苗は、帰ってきたばかりで疲れてるだろ？なに、1時間もしないで直ぐ帰ってくるぞ。」

そう言っつて、お二人は零体になって移動した。

神奈子 Side

「さて、ココがその現場かい？」

「そうみたいだね？」

私達は今、早苗が言っていた爆発現場に来ている。

ココに着てからと言うもの、何か普通じゃないものが漂ってるね？

「諏訪子。気付いてるかい？」私は諏訪子に聞くと、当然の様な顔で

「当たり前じゃん！微かだけど、妖力だね？こりゃ。」

「ああ。だが、力が弱すぎる……恐らく低級妖怪の悪戯かね？」

まあ、その妖力もココで完全に途切れてるから、爆発に巻き込まれて消えたね。」

「その妖怪は自業自得だけど、巻き込まれた人間は災難としかいい様が無いね……………」

私達は辺りを見回すと、部屋中央の部分が一番被害が大きいので、そこを見てみると

そこに、奇妙な透き通る結晶の様な物が落ちていた。

「ん？なにこれ？宝石？」とそれを諏訪子が、拾ったそれを、私も見つめた。

「こ、コイツは……………輝石じゃないか!？」

「へ？輝石ってあの奇跡の力を宿したって言う石の事？」

「ああ……………とりあえずこれを持ち帰って早苗に報告しようか。」そして、私達はその場を後にした。

少しして、早苗の待つ家に戻った私は、有りのままを話した。

「じゃあ、その妖怪は自滅したと？」

「ああ。あと、こんな物を拾ったよ。」私は早苗に輝石を差し出した。

「これは?……………」

「これは、輝石と言って、奇跡の力を宿した石だよ。」

早苗の奇跡を起こす能力と相性が良いから、持ってきたんだよ。

現場の中央に落ちてたから、形見として持っておきな?」

「はい………」私はほんの少し神力を使って、それを首飾りにして早苗につけさせた。

「この後、如何する?」

「あの、私、この街から離れたいです………」まあ、当然ちや当然だね。

「うーん、そうさね?如何する諏訪子?」

「噂だけど、ココよりはるか東に幻想が集まる場所があるって聞いたことあるよ?」

そこに行つて見ない?神社ごと一緒にさあ?」

「神社ごとかい!?!かなりの神力使うね………」

それに、術式やら何やら組み込むのには、最低でも数ヶ月は掛かるけど?」

どうだい、早苗?」

「正直、直ぐ離れたいんですけど、神奈子様が言うのも分かりますので、それで。」

「じゃあ、今日はもう休もうか?私達は戻るけど、早苗?大丈夫かい?」

「はい………」少し落ち着いてきましたから。」

「それじゃあ、早苗、おやすみ………」

「またね。私は時々様子見に来るからね?」

「はい。では神奈子様、諏訪子様、お休みなさい。」

??? Side

「はあく、最近暇すぎて退屈なんだぜ………」  
「私は箒で空を飛んで、自分の家に帰る途中魔法の森から、明るい光が突然現れたが直ぐに消えた。」

「な、なんだ!?あの光?」

私はその光があった場所へ、降り立つと一人の男が傷だらけで倒れてるのが見えた。

「な!?お、おい!大丈夫か!?しっかりしろ?」

「う………う………」

「どつちら、まだ息があるな……ココからなら、直ぐ家に着くな?」

よし。箒に乗せてつと。」

私は、傷だらけの男を手当てする為、箒に乗せ自分の家へと向かった。

**ブローグ：日常の終わりと幻想の始まり（後書き）**

ブローグにしては、長いけど、大丈夫だよな？

これからも上手く書けるよう頑張りますので

では、また！

**第二録：白黒の少女と人形少女は魔法使い？（前書き）**

ふう〜、更新完了っ！

まだ序盤だから、更新早いけど、話数が多くなると流石にきついね。

それじゃ、東方錬術録スタート！

## 第二録：白黒の少女と人形少女は魔法使い？

竜耶Side

「ん？・・・ココは？・・・知らない天井だ？」俺は朦朧とする意識の中、目が覚めた。

どうやら、ベットに眠って居たらしいので、取り合えず身体を起こそうとした瞬間。

ズキッ！つと強烈な痛みが俺の身体を襲う。

「ぐう！？あああ・・・つう～」どうやら俺は、怪我をしているらしい。

身体を見ると、不器用だが包帯があちこちに巻かれている。

俺はどうしてこんな傷だらけなのか考えていると、扉が開いた。

扉から入ってきたのは2人の金髪の少女だった。

「おお？目が覚めた見ただけで、起きて平気か？」と不思議な帽子を被った白黒の少女が俺に声を掛けてきた。

「ん？君達は？」と少女達に名前を尋ねた。

「へ？ああ、アタシの名前は、霧雨 魔理沙だ。普通の魔法使いだぜ！」

「私は、アリス・マーガトロイドよ。七色の人形遣いで魔女よ。で、貴方は？」

魔法使いやら魔女やらと、現実離れた名乗り方だったが、今は気にしなかった。

「俺の名前は、霧島 竜耶だ。」

「そうか。竜耶って言うのか？呼ぶ時は名前で言いか？」

「ああ、構わない。むしろ敬語の様な堅苦しいのは苦手だな。」

「じゃあ、私も竜耶と呼ぶわ。」

「所で、竜耶。なんでお前は魔法の森で傷だらけで倒れてたんだ？妖怪にでも襲われたか？」

魔法の森？妖怪？何のことを言ってるのか、分からん。

「俺は、一人で大学の実験室で薬品の調合実験をしていたら、その薬品が光だして

爆発したのは覚えてるが、それ以上の記憶は無いな……」

「と言う事は、その爆発の影響で此方に来てしまったのね……」

「そっいえば、ココは何処なんだ？」

「ココは、アタシの家だぜ。」と魔理沙はニカツと笑いながら答えた。

「魔理沙にアリスだったか？さつき、此方に来てしまったと言っていたが

どういう意味だ？まるでココが特殊な場所に聞こえるが？」

「正直に言うけど、取り乱したりしないかね？」俺は「ああ。」と頷く

「ココは、外の世界で忘れ去られた者達が行き着く場所。幻想郷と呼ばれる所よ。」

因みに竜耶。貴方の様に外の世界から来た人は、ココじゃ外来人って呼ばれてるのよ。」

「外の世界？幻想郷？それに忘れ去られたってまるで、最初から居なかつた見たいに聞こえるな？」

「大抵は、ある人物の気まぐれで来るのも居るけど。貴方の場合は多分

爆発による事で死んだことにされ忘れ去られた・・・そんな感じかしら？」

「つまり、例え戻れたとしてもあっち側には俺の居場所はない。と言う事か？」

「残念だけどそうなるわね。」

「そうか・・・ならこっちで居場所を作らないとな。じやないと本当に消えそうだ。」

「ずいぶん落ち着いてるのね？普通の人間は取り乱したり、ショック受けたりするけど？」

「んな事してても、状況は変わらないんだ。だったら答えは一つしかないだろ？」

「ん？竜耶！？包帯が赤いぞ！傷口開いたのか！」

「ん？ああ、さつき起きた時だな。結構痛かったからその時か？」

「取り合えず、止血し直して、包帯替えた方がいいな？アリス。手  
伝ってくれ。」

「はいはい……」

俺の身体に巻かれていた包帯は、傷口が開き血で汚れたので新しい  
包帯に変える為に一旦解いた。

しかし余り血が流れていなかった事に、二人は俺の身体を不思議そ  
うに見ると同時に顔が火照った様に少し赤く見えたのは気のせいか？

「どうした二人とも？それに顔が少し赤くないか？」

「へ！？あ、ああ。大丈夫だぜ！」「そ、そうよ！？気のせいよ！」

「しっかし、傷口開いた割りには血があんまり出てないな？」

「ああ、多分、無意識に筋肉を引き締めて止血したんだと思う。」

「こつ見えても、其れなりに武術とかやってるからな。」

「まあ、治療しやすいし良いか？少し沁みるぞ？」と魔理沙は傷口  
に軟膏を適当に塗った。

「いっただだ！？おまつ強すぎ！！」涙目に成りながら、俺は必死に  
痛みに耐える。

マジ痛えぞ！？これ！

「ちょっと魔理沙！そんな事したら、また傷口開くでしょ！貸しなさい。」

と魔理沙の手から軟膏と取り上げ、アリスが手際よく患部に塗りつける。

「サンキュー……アリス……マジで助かったよ。」

「この軟膏は魔法薬で作ったものだから、明日には殆んど治ってると思うから」

今日は安静にしてれば良いわ。」

「だけど、ココは魔理沙の部屋だろ？流石に気が引けると言うか……」

「何だったら、添い寝でもいいぜ？」とニヤニヤと悪戯っぽく笑う魔理沙。

「いらねえよ！そんな趣味ねえし！？いつつ！……」

「はあく、それじゃあ私は帰らせてもらうわよ？」アリスはそう言っ  
て自分の家に帰って行った。

「まあ、私は今回ソファーで寝るさ。」扉に手をかけると魔理沙は不意に俺の方を向いて、また悪戯っぽく笑いながら

「ああ、そうそう。欲情して漁ったりするなよ？」

「誰がするか！んな事！？」俺は怒鳴ると魔理沙は笑いながら出て行った。

「はあく、精神的に疲れた…………俺も寝るか……………」

これから俺は、如何なるんだろうな……………  
早苗ちゃん元気かな……………もしかしたら、もう忘れてる  
んだろうか？

いや…………考えるのはよそう…………取り合えず、今は休んで今  
後の事考えないと……………

そして俺は眠りに付いた

魔理沙 Side

「ふう〜、ああ言ったものの、内心ドキドキだったぜ……………  
それにしても、結構引き締まってたな？竜耶の身体……………  
ってアタシは  
何考えてんだ……………はあくもう寝よ……………  
……………」

アタシは、そこに有ったソファーに寝そべり、毛布を掛けて眠りに  
付いた

……………

竜耶 Side

翌日

「んう？もう朝かあゝ……………」俺は起き上がり周りを見た。

本やら何やら色々ある。ああ、そういえば魔理沙の部屋だったか？

「はあゝ、やっぱり、夢じゃなかったな……………」俺はベットから降りて包帯を取り  
身体の傷を確認した。

「凄いな……………あの傷がもう治ってるとは……………さすがは魔法薬だ。」

包帯を取った俺は、文字どおり上半身裸だ。近くに有った俺の服を着て、部屋を出ると

魔理沙は、ソファから片足出しながら毛布を半分蹴っ飛ばして寝ていたので

俺は、毛布を掛け外に出た。

「ふむ……………これが魔法の森か？中々綺麗だなゝ。」

そう言っただ俺はさっき着た服（長袖のYシャツ）を脱ぎ、枝に引っ掛け

鈍った身体を鍛える為、久々に武術の鍛錬を開始した。ココじゃ何が起るか  
分からないからな……………

魔理沙 Side

「うゝん……………何の音だ？さっきから……………」さっきか

ら音がする。外からだろうか？

何か、キレが有るような音が響いて、アタシはそれで目を覚ました。半分寝ぼけながらも、玄関の扉を開けると、その正体が分かった。それは竜耶だった………

ビュン！ブン！スパーン！

「凄げえ………」それしか出てこなかった。

竜耶の拳や足から繰り出される、攻撃の一つ、一つに、一切の無駄が無かった。

まるで、踊ってるかの様に、アタシはそれに魅入っていた………

竜耶 Side

「ふっ、はっ、せいっ、りゃっ！」

鍛錬を始めてから、大体1時間だろうか？身体は汗でだらけに成っていた。

どうやらかなり鈍ってた様だな……昔の様に鍛錬していなかったので

少し動きづらかった。

俺は最後に、思いっきり地面を足で踏み込むと、少しヒビが入り目の前の樹に向かって、拳を突き出した。

樹の中央には、俺の拳から繰り出された衝撃で、樹の表面が少し陥没していた。

「ふっふっ、ふう〜………ん？」俺は呼吸を整

えると同時に視線を感じたので  
振り向くと、魔理沙が玄関で佇みながら此方を見ていた。

「魔理沙？どうかしたか？」

「へ！？ああ・・・寝てたら外から音がするんで見に来たら、  
竜耶が居たんで少し見てただけだぜ？」

「それより、竜耶！凄いな！お前あんな事出来たのか？」

「まあ、昔のように上手く行かなかったけどな？」

「そうなのか？アタシは凄すぎて興奮物だったぜ！」と笑顔で魔理  
沙が言いながら  
近くに綺麗な水が入った桶に、タオルをつけて俺に渡した。

「そつだ魔理沙？これから如何するんだ？」俺はそのタオルで汗を  
拭き  
今後は如何すれば良いのか正直分からなかった為、魔理沙に相談し  
た。

「うーん、取り合えず博麗神社に行くか。」

「博麗神社？そこに行つて如何するんだ？」

「あそこには、霊夢って知り合いの巫女が居るんだ。  
取り合えず其処に行けば、今後の事は大体如何にか成るはずさ。」

「そつか・・・そういえば魔理沙。俺の服は此れだけしか無  
かったのか？」

流石に、半袖のシャツに、長袖のYシャツだけだと不憫だ。

「ん？あ、そういえば……ちょっと待っててくれ。」そう  
言って、魔理沙は家の中に入  
って行くと直ぐに戻ってきた。

「ほれ。このコート、血が付いてたけど洗ったら取れたから  
干して乾かしてたのを、スツカリ忘れてたぜ！」

俺はそのコートを羽織った。

「うん。やっぱりこれがあるとしつくり来るな。」

「じゃあ、行こうぜ！」と魔理沙は、箒に乗り空に上がろうとすると

「おい！俺は飛べないぞつと言うか、お前飛べたのか？」

「ああ、そういえばそうだったなあ、すまんすまん。じゃあ、後  
ろに乗ってくれ。」

俺は、魔理沙の箒の後ろに乗ると、そのまま空高く上がり移動した。

「おお！！凄いな！此れも魔法の一つか？」

「そうか？こんなものやろうと思えば、誰でも出来るぞ？」「少なくとも、今の俺は無理だから」

そして俺達は、そのまま博麗神社を目指して出発した………



## 第二録：白黒の少女と人形少女は魔法使い？（後書き）

### 後書きコーナー

璃燐「いえーい！2話更新完了だぜ！」

竜耶「ああ、今はまだ順調だな。」

魔理沙「どうでも良いが、ソファで寝たからあちこち身体が痛いぜ。」

竜耶「すまん。魔理沙。」

璃燐「それにしても、今日は付いてたぜ！東方関係の公式資料が店先に置いてたから、即買ったぜ！」

璃燐「しかも、スペカとキャラ解説の二冊だから便利だ。」

竜耶「それで、少しは執筆速度が上がればいいがな。」

璃燐「まあ、其処は穩便に見てくれよ……書く方にも色々あるんだよ。」

魔理沙「まあ今回はこの辺で作者弄るの止めるか。」

竜耶「だな。」

璃燐「お前ら何気に酷いな！？って明日も早いからもう寝るぜ！」

璃燐「それじゃあ、感想やメッセージをドシドシ来るの待ってまーす！」

**第三録：巫女とスキマと能力開眼？（前書き）**

漸く3話更新です。スペカ設定きついな……

まあ、そんなこんなで、東方錬術録スタート！

### 第三録：巫女とスキマと能力開眼？

竜耶 Side

今現在、俺は魔理沙の箒に跨り、大空を凄い速さで駆けて移動中だ。

「ヒヤホオーーー！気持ちいいな！！俺も自由に飛んで見たいもんだな！」

「騒ぐのは良いが、しつかり掴まってるよ！！じゃないとした噛むぜ？」

空を飛んでいる俺は、心躍っている。魔理沙も注意しながらも笑っていた。

「お？竜耶！見えて来たぞ！アレが博麗神社だぜ！」魔理沙がそう言うと俺は横から

先を除くと、建物が見えるな。あれが博麗神社か？以外に普通だな？

俺達は神社に降りるが、誰も居ないなあ？留守か？

「なあ、誰も居ないぞ？」

「おつかしいなあ？この時間帯なら、掃除してるはず何だけどなあ？」

魔理沙は、辺りをキョロキョロしながら探しているがそれで探せているのかは微妙だった……………

「ん？あれは……賽銭箱だな……でも何で紐が付いてないんだ？」俺は、

賽銭箱を見ると不思議に思った。

普通なら、お賽銭を入れて上にある鈴付きの紐があるはずなんだが？

「まあ、神社なんだし、何かご利益あるだろ」と俺は、コートに入っていた財布を

取り出して500円を賽銭箱に入れて、こっそり手を叩いた。

チャリン

「（どうか、平穏が続きますように……）」  
「（童耶は心の中で強く願っていた。）」

すると、神社の奥から、物凄い足音が聞こえてくる。どつやらどつちに向かって来ている様子だ。

バダダダダダ、キィー！つと、車がドリフトした様な音が聞こえると同時に  
目の前に脇の空いた巫女服を着た、女の子が息を切らしながら立っていた。

「はあはあ……あ……貴方……今……お……お賽銭入れた？」と息を切らしていた女の子が言う。

「ああ……確かに入れたが？（たかが、お賽銭くらいで全力疾走するか？普通？）」

と、童耶は疑問に思いながらも、あえて言わなかった。

「そう！なら中に上がって！お茶やお菓子を用意するわ。」と満面の笑みを浮かべながら  
巫女さんは賽銭箱を確認していた。

「所で、君は？」俺は、目の前の巫女服を着た、少女の名前を聞いた。

「え？ああ、私の名前は、はく「霊夢探したぜ。其処に居たのか」って魔理沙？何で居るの？」と名前を言う直前に、魔理沙の声が聞こえた。

「何でって、用事があるからに決まってるんだぜ！」と笑顔で答える魔理沙。

「あ！魔理沙の性で言えなかったわね。私の名前は、博麗 霊夢よ。ここ、博麗神社の巫女よ。」と、霊夢は握手してきた。

「俺は、霧島 竜耶だ。訳あって、魔理沙に助けられてな。ついさつきここに着たばかりだ。

君から言えば、俺は外来人だ。」俺も名乗り、握手した。

「まあ、詳しい話は中でしょう。」霊夢はそう言って神社の中に歩き出した。

俺達も後に続いて中に入った。

「成る程ね……そんな事がねえ……」私は、お茶を啜りながら、事情を聞いた。

「それで、俺はもうあっち側に居場所がないから、その後、どうして言いか分からないから

魔理沙に連れてきてもらって、博麗の巫女である霊夢、君に相談しに来たんだ。」

「そうね……普通に暮らすので有れば、人里に住むのが妥当ね。」

「そうか。それじゃ、明日辺りにでも行ってみるか……あ？でも俺、泊まれる所ないんだっ……」

「別に、竜耶が居ても、アタシは気にしないぜ！」と魔理沙は言う。魔理沙、仮にも同じ女なんだから、少しは遠慮しなさいよ……と私は、少しため息を付いた。

暫くして、話を終えた私達は、神社の外に出た。

「さて、まだ時間あるしこの後如何する？魔理沙？」

「そうだなあ、てか、全然考えて無かったぜ！」

「はあ、こつ言つ時は少しくらいしつか「あら、知らない人がいるわね？」って紫？」

突然、上から声が聞こえるので、私達は上を向くと不気味な目とりボンの空間が

広がって、その中から彼女は、身体を半分出して話しかけてきた。

竜耶 Side

突然、不気味な空間から現れた女性は、どうやら、霊夢達の知り合いらしい。

「なあ、二人とも。彼女は誰だ？」

「こいつの名前は、八雲 紫。この幻想郷を作った張本人。スキマ妖怪で妖怪の賢者なんて云われてるわ。あとは、神出鬼没。見た目からして胡散臭さ全開よ。」

「自己紹介ありがとね、霊夢。それと酷いわね、胡散臭い何て、私は此れでも正直者よ？」

と微笑みながら口元を扇隠し、否定している。霊夢は何処がよつと言いながら呆れている。

確かに、胡散臭い感じがするな……………気をつけよう……………

「それと、貴方は……………見た目からして外来人で有ってるかしら？」

「ああ。その通りだ。」なにやら、紫は俺の事をじろじろと見ている。

何なんだろうつか？

「……………貴方、能力が有るわね？しか

もかなり強力な能力をね？」

俺はどう言う意味か全然分からない？能力って何だ？

「なあ、能力って何だ？」

「能力って言うのは、その人にある特殊な力の事よ。因みに私は『境界を操る程度の能力』よ。」

「私は、『空を飛ぶ程度の能力』よ。」「アタシは『魔法を使う程度の能力』だぜ！」

「で、俺にはどんな能力が有るんだ？」

「それじゃあ、少し頭に手を載せるわね？実際に触れないと分からないから。」

「ああ、構わないぞ？」そうして、紫は俺の額に手を置き、目を瞑って集中する。

「貴方の能力は、『錬金術を操る程度の能力』と『あらゆるモノを解析する程度の能力』よ。」

これ程、強力な能力はそうそう居ないわよ？

しかも、接近戦に関しても超一流とはね………スペルカードルールも覚えれば

間違いない、幻想郷の中でも最強クラスに入るわね………  
「」

「なあ紫？錬金術って事は、竜耶はアタシやアリスと同じ魔法使い寄りになるのか？」

「ええ、基本的に魔法も使うことも出来るわね。」

錬金術は、様々な属性効果の有る物を作り上げる事が出来るし魔法使いクラスの中でも最上位に入るわ。魔力もかなり高いし、霊力も

其れなりに有るわね。」

「竜耶・・・だったかしら？意識を集中して、手の平に魔力を集めて地面に触れて

貴方が、思い描いた物を作って見なさい。」

俺は、そう言われ手に意識を手中させる。すると、手が薄っすらと光りだした。

そしてそのまま、地面に手を置き作る物を頭で思い浮かべる。

「（試しに、細い剣でも作ってみるか？）」「俺は、ゆっくりと手を地面から離していくと

バチバチツ！と電気が走りながら、一振りの細い鉄剣が出来た。

「出来たな・・・これが錬金術か・・・」「俺はその出来上がった剣を見る。

確かに出来たのは良い。だが地面にある元素の質が悪い性で、強度は余り良くない。

精々剣術の素振り程度にしか使えないな。

「凄いぜ！竜耶！！剣を作ってる時かなり、かつこよ良かったぜ！！目なんか、鋭い感じでさあ〜」魔理沙・・・興奮し過ぎだ・・・

「能力を開眼させた上に、一発で成功させるなんて・・・

・  
・  
偶々来たけど、どうやら私は運が良かったみたいね。お陰で面白いものが見れたわ。」

「アンタ本当は、最初から知ってたんじゃないの？」霊夢はジト目で紫を見る。

「今回は本当に知らないわよ？私が連れて来たんなら兎も角・・・  
・・彼に関して

私は一切関与してないわ。」

「そういえば、さっき言ってたスペルカードって何だ？出来れば教えてくれると助かるんだが？」

「ああ、そういえばその事忘れてたわね？じゃあ良く聞いててね。」  
俺は、霊夢達にスペルカードルールに、付いて教えてもらうこと成った。

38

暫くして、説明を終えると

「つまり、通常は互いの指定したカードの枚数で、相手のスペルカードを

全て破れば勝ちって事か？」

「そうよ。ただし、異変とかが起きてる時は、相手は問答無用でスペカを使って

弾幕攻撃して来るのも居るから、その際は気をつけてね。」

「ああ。そつだ魔理沙？魔法使いなら、錬金術の書物とか無いのか？」

もしあれば、それ使って能力の訓練もしたいんだが？」

「ああ、なら家に戻って探してみるか？勿論竜耶も探すんだぜ？」

「流石に言いだしっぺだからな。其処まで馬鹿じゃないさ。」

「なあ、能力が使えるって事は、俺も空を飛べるのか？」

魔理沙は、大抵誰でも出来るって言うてたが・・・ちゃんと確認しといた方が無難だな。

「それに関しては、まず問題ないでしょうね。能力も一発合格なんだし

それも直ぐ出来るはずよ？空を飛んでるイメージで身体を力で浮かせてみて。」

俺は、紫に言われたとおり、空を飛びイメージで魔力を身体に纏わせて見た。

すると、身体が宙に浮いたので、試しに神社を一周して見た。

「おお！これも一発か！！流石竜耶だぜ！」

「これで、移動するときは、魔理沙に迷惑掛けなくて済むな？」

「じゃあ魔理沙。戻るとするか？」

「了解だぜ！」と言って魔理沙は、箒に跨り俺達は霊夢と紫に別れを告げて

魔理沙の家に戻る。

暫くして





### 第三録：巫女とスキマと能力開眼？（後書き）

ええ、どうだったでしょうか？漸く竜耶の能力覚醒しましたがこの後どういう展開が有るのか！

は、さて置きこれから頑張っていくので感想やメッセージの方御待ちして降ります。

では、また次回に！！

## 主人公設定01（前書き）

璃燐「さて、突然ですが竜耶の設定公開します。」

竜耶「なあ、作者。俺の拒否権は？」

璃燐「そんなん、あるわけ無いしょ？」

竜耶「理不尽だ……」

璃燐「まあまあ、まだ一回目なんだし？」

竜耶「待て！？一回目？つつか後何回あるって言っただよ！？」

璃燐「ん？何回だろうね。まあ、物語進んで行けば追加は一杯有るだろうね。」

竜耶「……OTZ」

璃燐「それでは、まだ少ないですが、どうぞ！」

## 主人公設定 01

名前：霧島 竜耶きりしま りゅうや

年齢：20歳

性別：男性

所持武器

無銘の鋼剣むめいのこうけん

髪型：ショートヘアー 髪色：明るい茶髪 瞳色：蒼色

服装：長袖のYシャツ上に焦げ茶色っぽいコートを羽織り  
下には、普通の青色のジーパン姿

人物情報

見た目は何処にでも居る、普通の大学生で学年は2年生。  
かなり頭が良く、1年間で卒業できる程の単位を獲得し、大学に行  
くも行かないも  
自由なのである。また幼い頃から武術や剣術等を学び、その実力は、  
ほぼ超一流。

竜耶は過去、10歳くらいに両親を無くして、親が残した保険金を  
使って

一人で生活している内に、誰も寄せ付けない性格になっていた。  
中学3年に上がり、一ヶ月くらい過ぎた頃だった。

早苗が他の生徒に、苛められているのを目撃してしまい、仕方なく助けたが  
その時に早苗に懐かれる。それから、性格が段々穏やかになり人付き合いも、其れなりにする様になった。

だが、薬品の調合実験の最中に、調合した薬品が爆発。  
その爆発の影響で、幻想郷の魔法の森付近に転移するも、傷だらけの状態の所を  
魔理沙が発見し助けられる。

能力：『錬金術を操る程度の能力』次に『あらゆるモノを解析する程度の能力』

#### 能力説明

『錬金術を操る程度の能力』

手に魔力を込めて、そこに有る物質と物質を練成して、新しい物を作り出す事が出来る。

例えば、手で地面に触れると、その中に含まれる元素同士を練成して武器を作ったり  
防御壁や鍔やじりを生成したり、水を氷に変換したりと様々なことが出来る。

また、錬金術専用の書物に記されているレシピを使って  
様々な効果のある腕輪・指輪・首飾り等のアクセサリを作ること  
も出来る。

練成で出来たこれ等を、錬術具と呼ぶ。

むしろ、こっちが錬金術の本来の使い方である。  
また、錬金術は、生成・分解・再構築の3種類あるが、竜耶は全部出来るとの事。

『あらゆるモノを解析する程度の能力』

この能力は例えば、其処にある物の名前、効果、使い方などを知りたいと思えば  
自身の瞳を通して、解析し、脳にその情報を送り、知識として知ることが出来る。

一度手に入れた情報は。余程の事が無い限り失われることは無い。  
因みに、この能力はある意味、霖之助の能力の強化版と言える。

スペルカード紹介

錬火『ブレイジングセイバー』

炎を媒介に炎弾を撃ちながら、炎の剣の5方向直線連射型のスペルカード。

錬水『スプライトヴァレット』

水を媒介した水弾を撒き散らし、相手の方向に向かって細い連射レーザーを打ち込むスペルカード。

錬風『エアリエルストライカー』

風を媒介に、大威力の竜巻を起こした集束砲型スペルカード。スペルの説明の際に見た時に  
魔理沙のマスタースパークを真似て作った物。

錬土『グレイズスパイカー』

土を媒介に、周りに撒布した石の槍を相手にぶつけるスペルカード。

錬雷『スパークバニッシュ』

雷を媒介し、周囲に無数の電球を展開させ、爆発すると電流が波紋の様に広がる。

拡散型スペルカード。

錬光『ホーリイペンタグラム』

光を媒介に光弾をばら撒き、五本の追尾式の光線を同時に発射し、五望星を描く様に

相手の動き封じる追尾式捕縛型のスペルカード。

## 主人公設定01（後書き）

璃燐「まあ、最初はこのくらいかな？」

竜耶「はあ……………」

璃燐「まあ、慣れるってその内？」

竜耶「そうだな……………」

璃燐「てか、スペカ考えるのマジで疲れたわ……………」

竜耶「だが、かなり増えるんだろう？」

璃燐「いや、増えるのは良いんだが、資料用に買った東方シリーズ  
難しくって

クリアできたのは永夜抄だけなんだよ。イージーでも難しい  
よ。

大体の会話さえ其れなりに有れば、書きやすくも有るしね。」

竜耶「まあ、その辺は頑張れ……………」

璃燐「ああ、何とか執筆上手くなる様、頑張りますので

感想やメッセージをお待ちしております。」

竜耶「それでは、読者のみんな、また今度本編で会おう。では！」

**第四録：素材集めと天狗の長？（前書き）**

どうも、漸く更新できました。

弾幕ごっこ、以外に難しいです……

では、東方錬術録スタート！

## 第四録：素材集めと天狗の長？

竜耶 Side

俺は今、魔理沙の家に居候している。俺は、彼女と一緒に魔法薬の調査をしている最中だ。  
今作ってるのは、俺の治療に使った薬の補充分だ。

「なあ魔理沙？これとこれ入り混ぜれば良いんだっけ？」

「ああ。それが終わったら教えてくれ。あとゆっくり混ぜるんだぜ？」

魔法薬の調査は面白いな？俺が居た外の世界だと、こんなにも便利な薬は他に無い。

機械工学が進んで発展してはいるが、その分、自然は壊され貴重な資源などが

いつ無くなるか判らない状況だ。

その点、この幻想郷は自然に囲まれた美しい土地で空気がとても澄んでいる。

あと、外の世界にも危険はあるが、幻想郷の方が俺は危険だと思つ。それは、妖怪だ。妖怪は人間よりも遥かに強く、人を襲い喰らう。しかし中には妖怪を退治する人だっている。

まあ、そんな血生臭い事はかなりの昔に終わっていた。

今じゃ、多少ではあるが妖怪も人里に来ては人と触れ合う者もいる。要するに平和だ。

と、そんなこんなで俺が調査していた物が出来たので、魔理沙に教

える。

「出来たぞ、魔理沙。コレで良いか？」俺は、初めて魔法薬を作る作業をしているので

魔理沙に間違っていないか相談した。

「ああ、これでいいぜ。よし、後は、それとこつちを混ぜれば完成だぜ！」

魔理沙は慣れた手付きで二つの材料を混ぜ合わせる。

「よし！これで終わりだぜ！！いやあ、助かったぜ！！竜耶！お陰で早く済んだぜ。」

「俺もそろそろ、錬金術で色んな物作ってみたいなあ。」

でも、材料を揃えるにしても、宝石や金属類なんて早々有る筈ないよな……」

「いや？あるぜ？」

「本当か！？流石は魔理沙だ。で何処に有るんだ？」

「妖怪の山。」と、普通に言ってきた。

「は？………すまん、魔理沙。もう一度言ってくれ？」

「だから、妖怪の山だと言ってたんだぜ。」やはり聞き間違いではなかった。

「なあ、魔理沙？お前は、俺に死んで来いとも言う気か？」

確かに、弾幕ごっこを慣れる為に、魔理沙を相手に訓練をしたが何

故にそんな

危ない場所な訳？

てか、妖怪の巣窟に素人が行って如何するよ？普通に死ぬるぞ？

「竜耶は大げさなんだぜ？竜耶くらいの腕ならそこ等辺の低級妖怪なんて

相手に成らないぜ？」

「そんなもんか？俺的には非常に、ヤバイ感じがするのは気のせい  
か？」

「大丈夫だって、それに今後の為にも慣れは必要ってもんだぜ？」

「はぁ………仕方ない、行くだけ行ってみるか？」

俺は、服掛けに有ったコートを  
取って地図を頼りに出発した。

「あ………竜耶に採掘場所教えるの忘れてたぜ………」

「

暫くして、俺は空を飛んで妖怪の山に入った。

そう、入ったの良い………そして俺は初歩的なミスに気付いた。

「はぁ）。魔理沙に、採掘の場所聞くの忘れてたな………」

「

「仕方ない、適当に探して見るか？」俺は、悩むよりも行動に徹し

移動を開始した。

適当に歩いて探してから、大体2時間くらいたったのだろうか？

「・・・・・・・・・・・・・・・・全然見つからない。つか、ココ何処だよ？」

そう、俺は完全に迷っていた。

「それにしても、疲れたな・・・・・・・・こころ休憩入れるか？」

俺は近くにあった、座るのに丁度良い石があったのでそれに腰を掛け休憩する事にした。

「しっかし、コレだけ探してもソレらしい場所を見たけど

どれもこれもハズレとは、流石に俺でも泣きそうになるな・・・・・・・・」

そう言いつつ、俺は竹筒に入っている冷たい水を少し口に含んだ。

「ほう？若いのに探し物のかね？一体何を探しているのじゃ？」

「いや何、この山に採掘場があると聞いて、来たのは良いが肝心の場所を

聞いてくるのを忘れて、所々色々な場所を探し・・・・・・・・て？」

あれ？俺一人なのに、一体誰と話してるんだ？ついにボケたか？

俺は立ち上がり、周りを探すが誰も居ない。

「お主、何処を見ておるんじゃ。ココじゃココ。お主の隣下じゃ。」

俺は言われたとおり、隣下を見た。

そこには、140cmほどの身長で長い黒髪に独特の和服（スカトモ和風っぽい）を着込み

その背には黒い翼が見えた。そう文字どおり幼女だ。

「君は……妖怪で合ってるかな？お嬢ちゃん？」

「ははは！このワシを、小娘呼ばわりか？」見たまんま言っただけなんだが？

「いや、見たまんま幼女だし？」「幼女言うな！！」  
と、全力で抗議してくる。やっぱり気にしてたんだな？

「ワシの名は、天魔。この妖怪の山の主にして、天狗の長じゃ！」  
嫌な予感的中したな。しかも初めて会った妖怪が天狗の長ってどんだけだよ！  
もし死んだら怨むからな、魔理沙。

「俺の名前は、霧島 竜耶だ。つい最近こちら側に来た、しがない錬金術師だ。」

「ほう？錬金術とな？と言つか其れは何じゃ？」

「まあ、簡単に言えば、物質と物質を混ぜ合わせて、新しい物作る事が出来るって事だ。」

「なるほど、其れで、採掘場を探してた訳じゃな？」

「ああ、そう言う訳で場所を教えて貰えないだろうか？」

「条件がある。それさえ呑んでくれれば、場所を教えても構わんし、好きに使っても構わん。」

そりゃあそうだよな？さて、割と危険な事じゃ有りません様に……

・・・

「で、その条件ってのは？」

「何、簡単じゃ。ワシと一勝負してくれんかの？」はい？いま何と？

「は？」俺は、咄嗟の一言に啞然とした。

「判ると思うが、ココはワシ等妖怪の住む土地であり、ワシはココの主だ。

だが幾ら主であるワシでも、簡単に許してしまえば、下の者達に示しが付かんのじゃ。

そこで、ワシとお主が戦って、お主が勝てば採掘場は好きに使って構わん。

負けた場合は、勿論の事。ココから早々に立ち去ってもらう。

何、命などは取りはせんから安心せい。」

「じゃ、そう言う事で。」俺は、天魔という少女に背を向いて立ち去ろうとした瞬間。

「ちよっ！待たんか！？」と、天魔は、いきなり俺のコートを両手で掴んで逃してくれなかった。

「避けれる争いは、全力で避けたいんだが？」

「お主、それでも男か？」

「じゃあ、逆に聞くが。どうして君は俺と戦いたがるんだ？そっちの方が謎だ。」

「（ギクツ！）そ・・・そんな事は無いが、ほら提案したのはワシじゃし

一度言った以上は、守る主義でもあるんじゃない！」

「はあく、わかった。勝負するから、いい加減放してくれないか？ コートが皺になる。」

そう言っただけで掴んでるコートを放した天魔は、満面とは言わないが、嬉しそうだった。

「勝負方法は、弾幕ごっこでいいか？」「うむ、良いぞ。」

俺は、まず魔力で身体能力を多少強化して、戦闘準備に入った。

「ほう？その年でそれ程の魔力とは。どれ・・・ワシも。」

天魔も妖力で身体を包んだ。おい、お前は天狗だろ？そんなの必要ないだろ！？

と、考えてる傍から、天魔はまず、接近を仕掛けてきた。コイツ以外に武闘派か！？

俺は、回避できそうに無い攻撃を、霧島流武闘術・流の型で攻撃の軌道を逸らす。

「ほう？ワシの体術をこうも簡単に受け流すとは・・・ たかだか十数年の技術で良くやりおる。」

何言っただけでやがる！受け流すのだから、身体強化しなけりゃ、当たっただけで

腕ごと持ってかれるっの！？

「ふむ。お次はコレじゃ！摩符『まじょうけんじんは摩衝拳塵波』！！！」

天魔は、すぐに間合いを取ったと思うと、袖の中からスペカを取り

出し発動した。  
すると、繰り出した拳から、摩擦熱にも似た光弾の弾幕を撃つてきた。

「ちよっ！いきなりかよ！錬水『スプライトヴァレット』！！」  
俺も直ぐにスペカを発動させ、持っていた竹筒から水を取り出しそれを練成で増幅させ、冷水のレーザーを連射する弾幕を撃ち込む。  
互いに弾幕を撃ち放つも、何とか相殺できた。

「君の能力は、摩擦を操る能力か？」

「残念惜しいな。ワシの能力は『摩擦と圧縮を操る程度の能力』じや。」

へえ、交互に使い分ければ、かなり便利だな？

圧縮で風圧を弄くって、空気の壁作ったり、攻撃時に起こる摩擦を操作すれば

鑢<sup>やすり</sup>状態じゃん？そんなの素手で防いだら、削り取られるな。

「今度は、こつちから行くぜ！錬土『グレイズスパイカー』！！」  
俺は手に魔力を込め、地面に触れると、岩の針山や石の矢などを天魔に撃ち放つ。

ドガガガガッ！

「ぬお！？コレはっ！当たったらっ！痛いじゃろっ！！！圧撃『暴風圧の注意報』！！」

天魔は避けたり、弾いたりしながら、スペカを発動し自分の周りの風圧を操って俺の弾幕をかき消した。

「中々やりおるな？だがコレなら如何じゃ！！翔圧『ヤタガラスの咆哮』！！」

スペカを発動した天魔は、自身の翼を広げ羽状の弾幕を撃ちだすと同時に、翼の前に空気を圧縮した球状を無数に展開させ、放射状の空気砲を俺に向けて発射した。

「おっと！？こりゃヤバイって！錬雷『スパークバニッシュ』！！」

向かって来る羽状の弾幕や空気砲に魔法で出した雷を媒介に無数の雷球を展開させた

雷球が空気砲に当たると、波紋の様に電流が広がり、向かって来る弾幕を掻き消しながら

天魔に電流を喰らわした。

だが、やはり実戦は違う。少し消し残しで所々に切り傷が見られる空気砲も2〜3発当たってしまった。

幾ら身体強化しているとは言え、これはかなり痛い。

「痛い痛う〜・・・完全に回避出来なかった・・・・・・初戦が天狗の長はレベル高過ぎだろ？」

「んう〜、少し痺れる・・・・・・てかお主、弾幕ごっこするのはコレが初めてかい？」

「知り合いと何回か訓練はしたが、実戦は君が初めてだよ天魔。」

「ははははは！のう竜耶？コレが終ったら、友人にならんかの？お前となら楽しそうじゃ！！」

天魔は満面の笑みを浮べて大きく笑った。

「ああ、良いぜ！だがその前に、決着着けようか？今の俺の全力見せてやる！！」

「ならワシも手加減せんぞ！」

俺達は同時にスペカを取り出した。

「しっかり掴まってないと、吹っ飛ばぜ！！錬風『エアリエルストライカー』！！」

俺はスペカを発動させ、風を媒介と共に両手に集まる風の凄まじさは最早、台風並みである。

「はははは！天狗が台風なぞに遅れをとってたまるか！！爆圧『風神の空爆砲』」

天魔もスペカを発動と同時に、妖力で空気を限界まで圧縮し続ける。その圧縮した空気球は、見た目こそ小さいが中には、想像を絶する程。

互いの準備が整ったと同時に、俺達はそれを撃ち放った。

俺達はあまりの威力に、目を瞑った。勢いが収まると周りの木々は折れ曲がったり

していた。結局両者引き分け。恐らく天魔は半分ほどしか力を出していないだろう。

出なければ、俺はあの圧力に耐えられずに、弾幕もろとも押し潰されていただろうな？

「いやあく実に楽しかった！こんなに暴れたのは何百年ぶりかのう！！」

あれ撃つといてまだピンピンしてんのかよ……………

俺なんて、魔力は殆んど使い切つてクタクタだつてのに……

「結局引き分けか……勝てなかつたし大人し「コラコラ、何勘違いしておるんじゃ?」?」

「ワシは、負けたらと言つたんじゃぞ?引き分けになつたが、お主は負けとらん。

よつて、採掘場は好きに使つて構わん。あと場所も教えよう。

それにコレからワシらは、友じゃ!

いつでも山に遊「漸く見つけましたよ!天魔様!」げげ!射命丸……」

突然、上空から天魔を呼ぶ声が聞こえたので、俺は上を見ると

天魔と同じ黒い翼を持った少女が居た。なんか怒つてる様にも見えるな?

あ、でも、天魔よりは背が高い。

「射命丸……なんでお主がココに居るんじゃ……」

「あれだけの爆発で、気付かない方がおかしいですよ?

それより、また、こんな所で油売つて……大天狗様もお怒りですよ?」

「天魔……君は仕事サボつてたのか?」

「ちつちがうわい!?ちよつと、息抜きしてただけじゃ!」

「ん?貴方は……人間ですね?ココは妖怪の山ですよ?

貴方の様な者が、来て良い居場所ではありません。

そうそうに立ちさ「ワシの友人じゃ、何か文句あるのか？射命丸よ？」って、天魔様！？」

「確かに、ワシが遊び呆けて居た事は事実じゃから、別に良いがのう……」

ワシの友人である、竜耶を侮辱するのであれば、同族と言えど容赦せんぞ？

なあ、射命丸よ？」

と、天魔が言い放った瞬間、射命丸と言う少女に向かって、とてつもない殺気を放つと

一瞬で、顔を真っ青にして、沈黙した。

「さて、今日はもう戻らねばならんな……竜耶、言い掛けてたが

何時でも遊びに来て構わんからな？

それと、射命丸よ？竜耶が来た時はお前か、お前の部下に案内させよ。良いな？

あ、それと、採掘場の場所も教えておくんじやぞ？」

「はっはいいい！！！」

「それでは、竜耶よ。今度会う時は一緒に酒でも飲み明かそうぞ。」  
そう言つて、天魔は翼を羽ばたかせて、帰っていった。

「あ、あの……採掘場所と帰り道をご案内しますので、付いて来て下さい。」

「ああ、宜しく頼む。それと大丈夫か？」

「ええ、まあ……先ほどは私も気が立っていたので……すいませんでした。」

「いや、気にしてないよ？むしろ警戒するのは当然だろ？じゃあ、案内してくれ。」

「あ、はい。それと申し送れました。私の名前は射命丸 文と申します。」

文。新聞を発行しますので気が向いたら見てください。」

俺は、彼女に案内してもらい、採掘場と帰り道を教えてもらいそのまま、魔理沙の家に帰った。

ガチャ

「ただいま……」

「あ、お帰りななだぜ！」

「さて、魔理沙。最後に言い残すことはあるか？有るなら10秒以内にごうぞう？」

「ちょ、ちょっと待て竜耶！？場所を教えなかったのは悪かったからー！」

「んな事は、どうでもいい！！何処が低級妖怪しか居ないだ！

天狗の長が出てきて大変だったんだよ！さあゝ覚悟しろ！！」

俺は、魔理沙の首根っこを掴み玄関へと引きずってロープで縛ると

俺は一つのスペカを取り出した。

「ごめんなさい!?!ゆるし「錬風『エアリエルストライカー』!?!」  
ぎゃあああああ!?!」

こうして、またも俺の一日は終わりを告げたのであった。

#### 第四録：素材集めと天狗の長？（後書き）

璃燐「ふう、やっと更新できたよ。」

竜耶「ああ、今回はかなり疲れたな・・・全く、何で最初の相手が天魔なんだよ！？どう考えても、最強クラスだろが！？」

璃燐「良いじゃないか？どうせ、お前もかなり先だが、化け物クラスの間入ります。　　るんだからさ？」

璃燐「それにしても、天魔の設定めっちゃきつかったです。殆んど勘で作った

キャラだったので。能力とスペカも行き当たりばったりで作ったから

マジしんどかった。」

竜耶「さて、時間も遅いことだし、そろそろ、お開きだな。」

璃燐「ああ。では、読者の皆様、感想&メッセージをお待ちしてま  
す。」

**第五録：古道具屋の主人と錬金術師（前書き）**

ええ、長らくお待ちしました。

執筆が進まず、今日までかかってしまい申し訳ございませんでした。

それでは、東方錬術録。

ゲームスタート！

## 第五録：古道具屋の主人と錬金術師

竜耶 Side

俺は昨日、魔理沙にスペカを使ってお仕置きし、吹っ飛ばした。

魔理沙が家に戻って来ると、服が所々破けていたので着替る為に、部屋に入った。

部屋から戻ってきた魔理沙は、その服をゴミ箱に入れた。

俺は、ゴミ箱からそのボロボロの服を取り出し、錬金術の再構築を使って

こっそりつと服を修復した。「ちょっと形が違つかも知れないが、まあいいか？」

そして、俺は眠りに着いた。

翌日……朝になっているが、俺はまだ昨日の疲れが残っている為

未だに、ソファで眠っている。

すると、隣からガチャッと扉を開ける音が聞こえる。魔理沙が起きて来たようだ。

起きようと思えば起きれるのだが、俺はそんな事お構えなしに寝る。

「まあ、昨日は何だかんだで疲れてるんだし、今は寝さしといて？」  
突然、魔理沙がテーブルの方向に目を向けると、ある物を発見したのであった。

魔理沙 Side

朝日が差し込み、その光でアタシは起きだした。

「ふあゝあ、よく寝たなあゝ。それにしても、昨日は酷い目にあっただんだけ……」

それにしても、竜耶も上達したもんだぜ。まあ、その性で、お仕置きは散々だったけど……

てっ言うか、あのスペカは流石だったなあゝ、アタシのマスタースパークと

ほぼ同威力だろうな？

と考えながら、寝巻きを脱ぎ、何時もの白黒の服に着替える。

着替えを終え、扉を開けると、案の定ソファーには竜耶が静かな寝息を立てながら

眠っていた。まあ当然だ。竜耶の話では、昨日は天狗の長と戦って来たらしい……

勝負は引き分けて事になったが、それでも十分凄いと思うぜ。

何たって、この幻想郷に居る最強クラスの实力者が手加減したとは言え、其れでも

あの化け物染みた強さを前に、あの程度の軽傷で済んだのだから。

アタシは、朝食を作ろうとキッチンの方を向いた。

すると、テーブルに何かが置かれている。

「まあ、昨日は何だかんだで疲れてるんだし、今は寝さしといて……ん？」

これは……私の服？なのか……」

それにしても、アタシ、こんな服持ってたっけか？何にしても、この服はどうして

スカートの丈がこんなに短いんだろう？  
まあ、デザインも良いし着てみるか？竜耶は丁度寝てるし。

アタシは、テーブルに置かれてた服を持ち、自分の部屋に戻って着替えて見る事にした。

竜耶 Side

「ん〜．．．よく寝たか？は微妙だが、これ以上寝ると身体が痛くなりそうだ」

俺は、そう言つてソファから起きて、キッチンに向かい朝食の準備をする事にした。

「あれ？なんか忘れてる気もするが．．．．．まあ、いいか？」  
と、そんなこんなで朝食の用意が出来たので、テーブルに次々置いた。

「魔理沙の奴遅いな．．．．．戻つて二度寝でもしてるのか？」  
そう想い、俺は魔理沙の部屋に向かって扉に手を掛けた時だった。

「あれ．．．．．か．．．．．ちまつた．．．．．」  
何やら、声が聞こえるが良く聞こえないなあ？まあ、起きてるんだし、部屋の整理でもしてんのかね？とお構えなしに、俺は手に掛けていた扉を開けた。

ガチャ

「おい、魔理沙。朝食とつくに出来．．．て．．．る．．．」俺は、朝食の準備が出来たから

知らせようとしたが、途中で絶対見てはいけない場面を見てしまい言葉が詰まる。

「へ？」つと魔理沙は呆けた顔でこちらを見る

「・・」

俺達は、少しの間だけ沈黙し続けていた・・・・・・・・・・・・・・・・

「う・・・・・・・・うわあああああああ！！」「」

そして、その沈黙の空間に互いの叫び声が響き渡る。

「見るなあーーーーー！！？」魔理沙の格好は上着は着ているものの

スカートの腰の所にあるチャックが引つかかって、下着が丸見えの状態だった。

顔を真っ赤にして、言い放つと同時に魔理沙は近くに有った六法全書並みの本を

音速並のスピードで俺の顔面に投げつけた。

「ぶうぐほ！？」魔理沙によって投げつけられた本が、俺の顔面に直撃した。

奇妙な声と共に、俺の視界は真っ暗になった。

魔理沙 Side

「はあくはあく・・・・・・・・・・」着替えてる最中に竜耶が来たもんだから、アタシは近くに有った

何かを投げつけた。

数分して、落ち着いたのか冷静さを取り戻したアタシは、引っかかったチャックを直して

服装を整える。それから竜耶の方を向く。

かなり酷い事（主に顔の部分に埋まってる巨大な本）をしてしまった。

アタシは、竜耶の顔に埋まってる？ソレ？を引き抜くと、見事に、その形通りの型が

そのまま、残っていた……………

「ああ……………またやつちまったんだぜ……………」とアタシはかなり反省しながら竜耶をソファーまで運んだ。

少しして、竜耶が復活したが、ちょっとだけ不機嫌だった……………

「ううゝ、竜耶あくだから悪かったてば」

「だからって、本を音速並で、しかも顔面にぶつける奴居るか？おおう……………痛え……………」

と、顔を押えながら手鏡で自分の顔を見ている。

「そ、それに、ノックしなかった竜耶だって悪いんだからな！」

「いや、声が聞こえたから、てつきり部屋片付けてるんだと思ったけど

なんで、また着替え直してんだ？」

「テーブルの有ったこの服を、着て見ようとしたただけだぜ？」

そう言うと、アタシは今着ている服で一回転しながら、竜耶に見せてみた

「ああ、思い出した。それ魔理沙が捨てた服を、俺の錬金術で再構築して奴だ。

その時は眠くて手元狂っちゃって、若干違う感じになっただけど、まあ大丈夫だろうと思ってそのまま、テーブルに放置して寝たんだっとな」

「へえ〜それにしては、結構デザインセンスいいな？ 気に入ったし今日からコレで行くんだぜ！」

アタシは、竜耶が新しい服を作ってくれたから嬉しくてしようがないんだぜ！

竜耶 Side

魔理沙は、俺が再構築で作り返した服を着て、かなり上機嫌だった。  
……  
まったく……俺の顔のこともう忘れてるよ……

「そういえば、魔理沙。俺がまだ行ってない所って在るのか？」

「行ってない所ねえ〜？あ、まだあそこ行ってなかったぜ」

「あそこ？」

「ああ、魔法の森の入り口に古道具屋があるんだよ。そこ案内するの忘れてたんだぜ」

「森の入り口か……基本は空飛んで移動してるから、知らなくて当然か？」

「なあ？朝食食ったら、連れてつてくれないか？」

「別に構わないんだぜ。アタシも最近行ってなかったしな」

俺達は、少し遅めの朝食を済ませると、空を飛ばずに移動する事にした。

魔理沙に案内を頼み、暫く歩いてると様々な物が無雑作に置かれた建物が見えてきた。

「着いた、ココが香霖堂だぜ。」

「ある意味、凄いな……」車のタイヤに、道路標識に、公衆電話に、狸の置物ね……他にも色々有るけど、置物以外はハッキリ言ってゴミだろ？」

ツツコミ満載だが、あえて何も言えなかった……言ったら店主が可哀想になった。

と、お構え無しに魔理沙が店に入ろうとしたので、後を追った。

魔理沙 Side

ギィィ……つと扉を開けると、その中には、また様々な物が数多く置かれ

其処には店主と思われる男性が、カウンターの椅子に腰掛けていた。

「この一風変わった道具屋に、一体何をお求……め……って、何だ？魔理沙じゃないか」

「何だとは、酷い言い草じゃないか、香霖。それに、今日はちゃんと用事で着たんだぜ？」

「君が、ココに来る用事って、八卦炉が壊れたか、物を盗みに来るかどっちだろ？」

「おい、魔理沙。置いてくのは酷くないか？」と、直ぐに、後ろから竜耶が入ってきた。

竜耶 Side

「おや？ここら辺じゃ見ない顔だね？ふむ……格好からして外来人かい？」

「ああ。俺は霧島 竜耶。あんたがこの店の店主か？」

「僕の名前は、森近 霖之助。この香霖堂の店主だ。時々、魔理沙見たいに香霖って

呼ばれる事もある。まあ好きに呼んでくれて構わないよ」

「なら俺も、香霖って呼ぶよ。俺の事は竜耶で構わない」

「さて、2人共。今日は一体何をお求めかな？」

「俺は、行ってない場所が他に無いか、魔理沙に聞いたらココを案

内されただけだ」

「まあ、適当に見てくれ。気に入った物が有れば持って来てくれ」  
俺は香霖に言われ、様々な品物を見て回った。

魔理沙が何やら、物を盗ろうとしてたので俺は問答無用の拳骨を叩き込んだ

ドゴン

「ふぎゅっ！？おうううう……い……痛い……酷いんだぜ、竜耶……」

魔理沙は涙目になって、俺を見上げている

「それは、お前（君）が悪い」「俺と香霖は、涙目になってる魔理沙に向かって

同じタイミングでツッコミを入れた。

「って、あれ？魔理沙？服装が何時もと違うような？」香霖は、いつもと違う事に気が着いた。

「ああ、これは竜耶が作ってくれたんだぜ。活けてるだろ！」

魔理沙は、クルッと一回転して可愛さを香霖に、アピールしていた。俺は、ふと視線を逸らすと、古錆びた刀と大きな紅い宝石の様な石が目に入った。

「ん？この刀……古錆てるけど……其れなりに強い靈力感じるな？」

「ああ、それは布津御霊って言う神剣なんだけど、模造品だと思う

よ？

幾らなんでも、大昔の神剣なんて早々残ってるはず無いからね。まあ、買い手も無いし

今回は無償で譲るよ」何とも気前が良い香霖だが、此れは此れで値が張るだろうに。

「ならこっちの、やけに大きい紅い宝石は何だ？ルビーか？」

「僕も最初見たときは、ルビーかと思ったけど、どうやら違つらしい。僕的能力を使つても

全然わからないんだよ。こんなのは初めてだね」

「香霖も能力持ちだったのか？」

「そうだよ。僕的能力は『道具の名前と用途が判る程度の能力』だよ」

「俺は『錬金術を操る程度の能力』と『あらゆるモノを解析する程度の能力』だ」

「へえ、能力を二つも持つてるとは……しかも僕的能力に似た感じの能力だね」

「なら、試しにこの紅い宝石を能力で解析して見ようか？」俺は、かなりの大きさの有る

紅い宝石の塊に手を翳し、「解析開始」と呟き調べてみた

「……この宝石は『鮮血の月』と呼ぶらしい。

しかも、鉱物かと思つたら

高純度の紅い魔力結晶だな」

「へえ、アタシも採掘で魔晶石の類は採った事は有るけど、ここまで大きな物は流石に初めてだぜ？」そう言うと、魔理沙は、更に物珍しそうに紅い結晶を見つめて居る次の瞬間

バチツバチチ！と突然俺の手が光り出す

「ちょ！竜耶！？何いきなり能力使ってるんだよ！！」

「知らん！？俺は練成なんて発動させた覚えは無いぞ！こいつが勝手に！！」

と言ってる内に、光に包まれた宝石の方を見たら、何時の間にか、透き通る紅い大剣を握り締めていた

「これは……………また、凄いものが出来たね？」

「す、済まない香霖。品物を勝手に……………」

「ふむ、これが錬金術か？まさか、ここで見れるとは思わなかったな」

「あと、今持ち合わせが無いのだが如何すればいい？」

「そうだね……………」

今度、錬金術で便利な道具が出来たら、是非見せてくれないか？もし気に入った物が有ったら買うよ。コレでどうかな？」

「本当にそんなので良いのか？」と、竜耶は少し唾然としながらも、

再度確認を取った

「ああ、構わないよ。今度、君の店がオープンしたら、時々足を運んでみるよ」

その後、俺と香霖は色々話して意気投合し盛り上がった。

何度か、魔理沙がまた物を盗もうとしたので、俺はその度に拳骨をお見舞いした。

「其れと、香霖。このパソコンは、電力を供給しないと動かないぞ？」

「そうなのか！？では後でやってみる事にしよう！ありがとう竜耶」  
そう言っつて、俺達は香霖堂を後にし魔理沙の家に帰った。

.....  
.....  
.....

外の世界・守矢神社の境内

早苗Side

「はあ……」私は今、溜め息を吐きながら境内の掃除をしています。

何故、掃除をしているかというと、私はあの事故の次の日、私は高校を中退し

そして、現在は神社で巫女の仕事をしながら、現人神としての修行をしています。

あと、神奈子様と諏訪子様のお二人は、交代しながら転移の術式を組み上げていますが

思ったより作業が難航していて「下手したら、一年以上掛かるかも」と苦笑いしていました。

「先輩……私は如何したら良いんでしょうか……」

先輩が亡くなってからの私は、毎日が空を切る様に過ぎてあの頃の思い出が

走馬灯の様に次々と甦ってきて、その度に涙が込み上げて来ちゃいます「

私は空を見上げながら、涙を流していると神社の中から、小さい人影が此方に

向かって来る。其れは諏訪子様だった。

「早苗……もしかして泣いてるの？」と諏訪子様は、そんな私を心配してくれている



第五録・古道具屋の主人と錬金術師（後書き）

ああ、早く紅魔境編に入りたいな。

第六録：一時(いつとき)の別れと新たなる始まり (前書き)

やっと更新できました。徐々に更新できるスピードが遅くなってきた……

まあ、そんなこんなで、東方錬術録

ゲームスタート！

## 第六録：一時（いつとき）の別れと新たなる始まり

第六録：一時いつときの別れと新たなる始まり

竜耶 Side

俺が幻想郷に来て、魔理沙と行動を共にしてから約2週間くらいだった。

俺は、そろそろ自分の家と仕事場が欲しいから、人里に行くと言つと魔理沙は「竜耶、やっぱり行くのか？アタシは一緒に居ても別に……」と言つてきた。

「ああ、そろそろ俺も自分の家が欲しいし、俺の錬金術使つて商売とか

したいって思つてな？あと、別に今生の別れじゃ有るまいし、何時でも会えるさ」

「……………うん」

「じゃあ、今度はお前が遊びに来いよ。魔理沙！」俺は、そう言つと同時に手を振りながら

魔理沙と別れ空を飛んで、人里に向かった。

魔理沙 Side

「竜耶、やっぱり行くのか？アタシは一緒に居ても別に……」

竜耶は、自分の家や仕事場が欲しい、と言って前々から霊夢の所に行って人里に住める様

に頼んで置いたらしい。霊夢にしては良く引き受けたもんだぜ。まあ、どうせ

賽銭入るとか何とかで釣られたんだろうな。

「じゃあ、今度はお前が遊びに来いよ。魔理沙！」そして、竜耶は手を振りながら

アタシに別れを告げ、空を飛んで人里へ向かった。

アタシは見え無くなるまで、竜耶の姿を見ながら手を振り続けた。別れが終ると、アタシは家に戻って辺りを見回す。

「アタシの家って、こんなに広がったけか……………」

竜耶が幻想郷に来て、約二週間、一緒に過ごしていたアタシの家はかなり広く感じた。

まるで竜耶とは、昔からずっと一緒だったかの様に過したこのリビング。

竜耶がベット代わりに使っていたソファ。一緒に色々な料理を作ったりしたキッチン。

「何なんだろうな……………この気持ちは……………胸の奥が変な感じだぜ……………」

「まあ、いつでも会えるんだし、暇な時に行くとするんだぜ！」と、いつもと同じで

アタシは、霊夢の居る神社に向かった

竜耶 Side

魔理沙と別れを告げた俺は、空を飛びながら人里を目指していると大きな門が見えた。恐らくあそこで間違いないだろう。

俺はいきなり門の傍に降りず、少し離れた場所から門に近づいた。

「止まれ、見ない顔だが里に何用だ？」と門番に止められるのは分かっていたので

俺は事情を説明した。

「実は、少し前に幻想郷に来た外来人だ。色々有って今日から里に住むことになった。

あと博麗の巫女から、この里に住んでいると言う責任者と言う人に話を通ってる

言われたんだが、確認してきて欲しい。」

そう事情を話すと、門番の一人が里の中に入って行った。

少しすると、大門が開き中に入って行った門番が道案内を言っ  
つて俺はそのまま  
着いて行った。

暫く歩いていると、少し大きな小屋の様な物が見えた。その入り口には、一人の綺麗な女性が立って居た。

「慧音さん、お連れしました。それじゃ自分は門に戻ります。」

「ああ、ご苦労さん。態々すまないな」

「さて、君が霊夢の言っていた外来人だな。名前は確か……」

「霧島 竜耶だ。これからこの里で世話に成るから、今後とも宜しく頼む」

俺は、女性に手を差し出し握手した。

「霊夢から聞いていると思うが、私の名前は上白沢 慧音だ。

この寺小屋で教師をしている。もし暇が有ったら外の世界の話とか色々教えて

くれないか？勿論、君が良いならで構わない」

「ああ、暇な時があれば、こちらも全然構わない。寧ろ話し相手は多いほうが良いしな」

「そういえば、君の注文通り、里の外れの場所に建築用の材料を置いたが

一体何をするつもりなんだ？」

「それは見てからのお楽しみさ。とりあえずその場所に案内してくれないか？」

「ああ、こつちだ」俺はそのまま、慧音の後に続いて歩き出した。暫くすると

里の外れの所に着くと、其処にはかなりの里の人達が来ていた

「なんで、こんなに人が居るんだ？」

「それは、この建築用の材料が大量に有れば其れなりに集まるだろ？」

俺はその人集りを抜け、材料の有る所で立止まり確認する。木材、

石材、レンガ材

ガラス材、金属材。まあ、これだけ有れば十分だな。

確認した後、俺は魔力を地面に放出すると同時に、材料の周りに俺が組上げた

独自の魔法陣が展開される。さらに両手にも魔力を込め魔法陣に手を翳し錬成を開始する

「な、何だ！？何をやる気だ竜耶！？」お？慧音はやっぱり驚いているな。

周りの人集りもざわついている。

「（作り上げるは、外の世界で住んでいた俺の家とアトリエだな・・・・・・）」

凄まじい音を響かせながら俺は、一つ、一つ、慎重に錬成し作り上げる。

数分後、無事に錬成が終ると其処には、俺が住んでいた家をそのまま再現し

さらに、其の隣には少々大きなログハウスが立っていた。

「よし！完成だ！」

「竜耶・・・さっきのは何だ？」慧音は、さっきの事を不思議そうに聞いてくる

「さっきのアレは俺の『錬金術を操る程度の能力』で錬成して家を作り上げたんだ。」

「今のが錬金術なのか？あんな大きな物までも作り上げてしまうとは・・・」

「いや、普通はここまで大きな物は作れない。一から術式を組上げて錬成する事で  
漸く出来る様になるからな」

「なるほど。だから其れなりに広い場所を指定した訳か？其れより  
コレから  
如何するんだ？」

「この後少ししたら、妖怪の山や山の採掘場行って、錬成素材の採掘と採取だな？」

ココ数週間は、それ等の錬成した物売って商売しようと思う」

「商売するのは良いが、幾らなんでもあそこは危険すぎる。下手したら  
死にかねないぞ？」

「ああ、其の点は大丈夫だ。天狗の長である天魔とは友人だから何の問題も無いし

許可書の代わりに、コレを貰ってるからな」

俺はコートの中から、天魔の妖力が籠った羽根飾りを見せた。

「天狗の長と友人って、ココに来た外来人の中で君が初めてだよ・・・」

慧音は、多少苦笑いしていたが何処か納得という様な顔をしていた。

「じゃあ、私もそろそろ戻るとするよ。流石にこれ以上は仕事をサボるわけにも

いけないからな？」そう言って、慧音は寺小屋に戻って行った。

「さて、家の中でも確認しますかね？」俺は出来上がった家の中の確認の為に中へ入った。

竜耶邸・室内

「おお！想像していたよりも、ずっと出来が良いな！！外の世界に有った家以上だな？」

ふむふむ？食器棚や本棚とかも、ちゃんと出来てるし安心した」  
流石に、食器やらの日用雑貨は無いから買わないといけないな。

「さて、次はアトリエだな？あつちもちゃんと出来てます様に・・・」

今度は、自分が色々な事をするであろう、仕事場の確認に向うことにした。

アトリエ内

「ふむふむ。こつちも割りと上手く出来たな？しかし、家とは違いこつちの方は  
半分以上は妄想に近いから、一時はどうなるかと思っただが案外、なんとかなるもんだな？」  
こんな事言ってるけど内心かなりびっくりだ、本当に我ながら良い出来だよ。

慧音Side

先ほどの竜耶のアレは凄かった。まさか、数分である様な立派な家を創り上げてしまう  
とは、錬金術は相当凄いものなのだろう。

「今度、暇が出来たら竜耶に色々訊くでしょう」「そう呟きながら、私は生徒が待つ  
寺小屋に向かっていた。

竜耶 Side

「さて、所々の確認も終わったし、山に採掘や採取にでも行くか」  
俺は、アトリエの奥から採取入れに使う籠を背負い、ツルハシやスコップ等を持って  
俺はそのまま、山に向かって飛んだ。  
ん？なんでそんな物が有るかって？それは、建築用の余った材料を錬成して作ったからだ。

椛 Side

妖怪の山・白狼天狗警備地区

「うーん、今日も平和ですね」私の名前は、犬走 椛。今日も平穏な警備で終って欲しい  
ですね。って、アレは人間？

まったく、どうして人間は里で大人しくして居られないのかと疑問に思いながら  
私は、警告しに向かった。

「そこのお前！止まれ！！ココから先は我ら妖怪の住む場所だ。人間が立ち入っては  
良い場所ではない！」私はこの時、まだ知らなかった

竜耶Side

「そこのお前、止まれ！！ココから先は我ら妖怪の住む場所だ。人間が立ち入っては  
良い場所ではない！」俺は採掘場を目指して、空を飛んでいると犬の様な白い耳と  
尻尾を生やした少女に、いきなり呼び止められた。

「まあ、止められるのは判ってたけど、其処まで怒ることなのか？」  
「当たり前だ！許可無く立ち入る者にはそれなりの仕打ちを受けて  
もらう！」

何やら、いきなり物騒になってきたな……  
俺はあまり争いごととは嫌いな為、この警備の人に天魔からもらった  
羽飾りを見せた

が、しかし

「ん？なんだ？そんなもの見せてなんだって言うんだ！私をコケに  
しているのか！」

あれ？なんで？天魔はコレは通行書の代わりだって言ったから見せたのに  
逆効果じゃないか？

「ちよつと待て、コレは俺が天魔から貰ったものだ。天魔はこれは通行書代わりになるから

って言われて見せたんだけど？」

「そんな世迷言を私が信じると思っているのか？やはり、人間はつくづく嘘を吐くな……」

もういい、二度と来れない様に痛めつけてやる！覚悟、このお馬鹿！！」「ぐげっ！？」

と、いきなり彼女の真上から、とび蹴りのような攻撃が、彼女の頭を直撃した

うん、アレは妖怪であろうと、人間であろうとかなり痛そうだ……

「全く、近くで天魔様の妖力が微弱に感じられたから、駆けつけて見れば貴女何を  
してるんですか！椀！！」

「うぐううおお………な………何するんですか………  
文先輩………私は警備の仕事を」

「そんなもの見れば判ります！私が言ってるのは何故この方に危害を加えようと

しているかと訊いているんです！」

「だ………だから、私は警備を」





本当に10分足らずで二人が戻ってきた。何もそんなに急ぐこと無いのに。

それに、俺はまだ休むんだけど？

暫く休んだ後、俺は文達が良い場所があると言って其の後ろを付いて行ったら

これはまた見事に、色々な香草や薬になる品質の良い薬草に各種のハーブなどを

ある程度の数を摘んでその場を離れた。

俺達は空を飛んでいると、椀と言う犬耳少女が俺に話しかけてきた

「あ、あの時は本当にすいませんでした。まさか本当に天魔様のご友人とは知らず

無礼な言葉を言つて申し訳ありませんでした……」

やっぱり謝ってきた。まあ幾らでも予想は出来るからあまり気にしてなかった。

「誰だつて始めは、不審に思うもんさ。しかも通行書代わりにあんな物見せたら

俺でも同じこと言つてたさ。だからそんなに、暗い顔しなくして良いよ」

「それじゃ、私達はこの辺で。竜耶さん、今度取材させてくださいね!では!」

そう言つて、文達と別れた俺はアトリエに帰る事にした。

戻ってきた俺は、早速錬金術の本に記されたレシピを用意手様々な道具に薬等を





第六録：一時(いつとき)の別れと新たなる始まり (後書き)

前の更新から一ヶ月近くしてなかったなので、急いで書き上げました！

それと、次回からは漸く紅魔境編に入ります。

私は何処まで出来るか判りませんが精一杯頑張ってみます！

それから、次回から感想や質問等有った場合

後書きや番外編でそれ等を色々とお答えしようと思います。

では、感想と質問が一杯来るよう祈ってます！

第七録：the 1 Stage：闇夜の紅霧に潜む宵闇の少女（前書き）

いやあ、またまた更新遅れちゃったよ……

まあ、グチグチ言ってもしょうがないので

東方錬術録

ゲームスタート！

第七録：the 1 Stage：闇夜の紅霧に潜む宵闇の少女

紅霧が発生して、かなりの時間が経過し気付くと夜になっていたので準備を済ませた俺は、紅霧が昼間よりも少ないことを確認し博麗神社に向かった

流石の俺でも、あそこまで濃い毒素を持った霧の中を行き来するのは難しかったので  
こうして、夜になるのを待っていたわけだ

「幾ら、薄くなったとは言え夜中に霧があるとやっぱり見えづらいな………」

俺は、ぼやきながら空を飛んで移動していると、長い石階段と紅い鳥居が

見えてきた。俺は神社に降り立った

「おかしい………何時もなら明かりが有る筈だが………  
……それに………」

そう、それは、人の気配が全く感じられないと言う事だ。まあ、気配と言っても、

普段居るのは霊夢と魔理沙くらいだけだから、あまり気にする事では無いのだが  
いくら居なくても、部屋には明かりくらい付いているはずだ

以前仕事が一段落し飲み会に誘われていたので行く事になっていた。



しかしなぜ、夜になって毒素を含む紅霧の濃度が減少したかは、解らないがそんな事より力の流れを頼りに、空を飛び進んでいた俺は神社の裏手に位置する、森に辿り着いた

「暗い森に紅い霧・・・・・・何とも気味の悪い場所だなココは・・・・・・それにしても

この森幾ら何でも、暗すぎやしないか？」

幾ら夜の森だからと言っても暗すぎるにも程がある・・・・・・まあ、紅霧が出てくるから何だろうけど、実に暗すぎる

「まあ、見え難いが・・・見えない訳じゃないから大丈夫か・・・」  
俺は、そう言いながら周りを警戒し、若干遅めに飛行していた。流石にこれ程暗いと何処から妖怪に奇襲されるか判らないので、警戒しないに越した事は無い

すると、突然周りの木々がガサガサと音を経てた次の瞬間何か飛び出して来たのだ。

飛び出た其れは、行き成り弾幕を撃ってきたが俺は普通に回避しその何かに向かつて

霊弾を撃ち、撃墜させ落ちた其れをよく見ると妖精だったのである

しかし何故妖精が襲ってきたのか？原因は一つ・・・・・・この紅霧だろう・・・・・・

どうやら、この紅霧は様々な毒素を含んでいる様だな

大抵の妖精は悪戯好きで好奇心旺盛だ。紅霧に含まれる何等かの毒素のせいで発狂し

理性を保てず、この妖精の様に暴走したのだろう……  
……  
まあ、稀に大人しく人の手伝いをする者も居るがな……

「だからつてなあ……幾ら何でも多過ぎだろうー  
！！」と、俺が叫ぶと同時に  
周りの木々から次々と暴走した妖精達が俺に向かって、攻撃して来たのである

俺は若干威力を弱めた霊弾と魔力弾を撃ち放って妖精を撃墜し気絶させる……

幾ら妖精に死の概念が無いとは言え、殺しは出来るだけしたくない……  
……  
それでも、何処にコレだけの妖精が居るのか疑問に思えてくる……  
……  
だが、そんな事御構えなしに次々襲ってくる妖精達は、はつきり言  
つてキリが無い！！

「仕方ない、霊力はあまり使いたくないが……結符ほうまけつ『逢魔結  
界陣』」

俺は一枚のスペカを取り出し発動させ、妖精達の前に結界と名の言  
う壁を作り

何とか、追っ手を振り切った俺は前へと進んだ……

「ふう〜、霊夢に結界術を習っておいて正解だったな……  
……」

俺は2〜3週間前に霊夢に頼み込んで、結界術を基礎から教えて貰

ったのだ。

霊夢は結界術を使った攻防一体を主体とした戦い方だ。結界は本々、防御や援護などに使われる事が多いが、彼女は攻撃にも結界術を使用している事が多い(まあ、他にも有るが)

「其れに、スペカ以外は霊力魔力共に使わないから楽で良いな」コレは「そう言う俺は自身の両手の指に詰められた、小さな蒼色と紫色の結晶を詰め込んだ指輪を見た。

実はコレ、100個以上ある霊晶石と魔晶石を俺の錬金術の分解で、二種類の石から霊力と魔力を分離させ天魔の能力の圧縮を使うことで、其れ等は見た目こそ小さい物の超高純度の結晶体を作る事に成功した。

あと自分で作って置いて何だが、何故かコレ、弾幕を撃つても消耗した霊力と魔力を周囲の霊気や魔素を自動で吸収する機能がある事が判明し、使って捨てるという事が無く成ったので非常に便利なのだ

さて、結構森の奥まで来たが、少し異常だ……それは奥に行くにと徐々に暗さが増してきていたのである。

「結構奥まで来たな……. . . . .それにしても、この暗さは明らかに自然の暗さじゃないな？」

この異変に乗じて、他の妖怪まで介入されると後々面倒だな……

・あの二人も

探さなきゃ成らないってのに……ん？何だアレ？」

疑問に思ったのは勿論、目の前にフヨフヨと浮いている黒い塊である。

俺は「新種の毛玉か？」と思い近くに落ちていた石を投げってみた

「いたっ!？」と言う声が聞こえた。何だ新種の毛玉じゃなかったのか……

「うう……痛い……もう！誰よ、行き成り硬い物、投げたのは！」

と黒い塊の上からズポッと音を立てながら何者かが頭を出してきた。よく見たら女の子だ……。其れも人里に居る子供くらいの年齢と大差ない……

「あ！あなたね！私に変な物投げたのは！もう、すごい痛かったんだから！」

「すまん、其れについては謝る。こっちは新種の毛玉かと思ってな？」

「所で、君は妖怪か？まあこんな夜中に其れも森に居るんだ。其れしか無いだろうが……」

「そうだよ、私はルーミア。お兄さんは？」少女は名前を言うと、自身を覆っていた黒い物を消していた

「俺は、霧島 竜耶だ。ルーミアか？所で質問がある。この森を紅

白の巫女と

白黒の服を着て箒に乗ってる魔法使いを見ていないか？」

「そういえば、ついさっき通って行ったよ？食べようとしたけど、その代わりに

弾幕でポロポロにされたよ……2対1は酷い……」

……」

まあ、あいつ等ならやりそうだな……

「ならルーミアは、その二人がどっちへ行ったかわかるか？」

「えーと、この森を真っ直ぐ行った所に大きな湖があるんだけど、多分そっちに行った

と思うよ？」

……  
神社の裏手の方角には、湖があるのか……初めて知ったな……

「じゃあ、次の行き先は決ま「其れよりも、お兄さん」ん？」俺は次の場所へ

向おうとした処を先ほどのルーミアに呼び止められた

「目の前に居るお兄さんは、取って食べても良い人類？」そう言い放つと同時に僅かながら

殺気を感じた。見た目は子供だが、やっぱり妖怪だな……

まあ、天魔や文に比べたら微々たるものだけだな

「ああ……悪いが俺は食べられない人類だ。悪いなルーミア」

「うーん、でも食べないと味が分かんないから食べてから決めるのだ」  
「どうやら聞く耳持たないらしいな。はあ、無駄な戦闘はしたくない無いただけどなあ  
妖怪である以上、妖精の様に軽くあしらえるもんじゃないな・・・  
と、心の中で愚痴を溢していると、あの子は既に弾幕を撃ち放っていた・・・」

「ぬおっ！あぶなっ！？つてコラ！こっちはまだ準備してないのに行き成り撃つな！」

「よそ見してた、お兄さんが悪いんだよ。月符『ムーンライトレイ』！」ルーミアは  
スペルカードを取り出しスペルを発動させた  
月の光にも似た細い光線状の弾幕が俺に向って襲い掛かってきたが、俺もスペルカードを取り出し、スペルを発動させる

「さつきは出遅れたが、此れでどうだ！錬雷『スパークバニッシュ』」  
俺は、腕輪に魔力を込めて雷を作りそれを媒介にして、周囲に無数の電球を展開させる  
月色の光線状の弾幕は雷球に当たり爆発したそれは、電流が波紋の様になりながら  
ルーミアに向かって行く。どうやら当たって少しだけ感電しているようだ

「ううう・・・じびれるのだ・・・」

「もういいだろ？さっさと降参してくれないか？こっちは、ちょっと急いでるんだ」

「うう、こつちもお腹空いてるんだから、いい加減食べられてよ！夜符『ナイトバード』！」

ルーミアは、そう言って直ぐ次のスペルカードを発動する。通常の弾幕に加え、魔力で

出来た黒い鳥の様な弾幕を撃ち放ってきた

「俺だつて食べられるのは勘弁だつての、他を当たってくれ。錬水

『スプライトヴァレット』」

俺はスペルを発動すると、魔法で水を生み出し其れを媒介にした水弾を撒き散らしながら

弾幕の方向に向かって連射性のあるレーザーを撃ち放つて、ルーミアのスペルカードを

撃ち破った

「うう、こつなつたら取って置きだもん。闇符『ダークサイドオブリザムーン』！」

ルーミアが切り札と言ったスペルカードを発動させると同時に、辺りに絶え間なく

吹き続ける風の音。蠟燭の灯が、風に揺られて消えるかのように、宵闇の中に少女の姿が

消えていった。

「（此れほど、暗いと迂闊に動くのは危険か……まずは、あの子の出方を見るか……）」

眼を見開いてもそこにはおらず、しばらくの時を経て、突如として闇の中から眩く赤い

弾幕が迸る。小さい弾幕をまきちらし、黄色く輝く中型の弾幕を規

則正しく放出していた  
其れを見て、俺は直ぐに懐から一枚のスペルカードを取り出し

「其処か！！錬火『ブレイジングセイバー』」俺はスペルカードを  
発動させ、腕輪に魔力を  
籠めて炎を生み出し其れを媒介に炎弾を撃ちながら、炎剣状の弾幕  
の連射のある弾幕を、ルーミアが居ると思われる方向へ撃ち放った。  
勿論、幾ら暗くなった所で辺りは森だ、木々  
に引火しないように魔力配分は考えて使っているから大丈夫だろ？

ルーミアSide

「うう………な………何で………この暗闇の中で、私に  
当てれるの………」  
さっきの、巫女と魔法使いの二人組みと言い、あの竜耶って言うお  
兄さんと言い、最近の  
人間の強さは異常よ！！人里にも数人の退治屋は居るけど、ただ適  
当に弾幕撃ってるだけ  
でココまで強くなってる………  
でも、まだこの暗闇は消えてない以上、まだできるはず………  
私も見えないけど………  
ポケットに入ってるスペルカードはあと一枚か………私も妖  
怪の端くれ、ただじゃ  
やられないもん

竜耶Side

さて、とりあえず攻撃して見たものの、この暗闇では当たったのか如何か何て判らない

それにしても、まだ暗闇が晴れない以上あの子は、まだ攻撃してくるだろうな……

はつきり言つて、見た目が子供な為に非常に戦い難い……

「それでも、やるしか無いんだよなあ。まあ、気絶程度で済ませるから問題ないか……」

でも、どこから来る……さつきは弾幕の軌道を読んで攻撃したが、次はどう来る……

そう考えていると、何処かは判らないがルーミアの声が聞こえてくる

「お兄さん強いね、人間なのに。でも私、本当にお腹空いたから次で終わりにするね

闇符『デイマーケイション』！』すると、四方八方から弾幕が俺に襲い掛かってくる

「くっ！」俺は、ギリギリの範囲で押し迫って来る弾幕を回避し続ける……

だが、俺はあることに気が付いた。それは、弾幕の軌道が全て滅茶苦茶な事に

「（もしかして、あの子自身も俺の姿が見えてないんじゃないか？）」

次々と迫って来る弾幕を回避しながら、姿の見えないルーミアの位置を探るには不規則

ではあるものの、見えづらい弾幕の軌道を読みしかないが

どうやら、あの子は本当に俺の姿が見えないらしい。それでも偶然なのかその弾幕は

俺の周りを取り囲んでいる……が、それだけだった  
そして予測が正しければ、次に来る方向は……

「これで、お終いだよ！夜符『ミッドナイトバード』！」

「真上だ！錬風『エアリエルストライカー』！！」俺は、腕輪に籠  
める魔力の費消を押さえると

同時に威力を最小限に抑えながら、風を媒介に小規模の竜巻状の砲  
撃を上から迫って来る弾幕の向こう側に居るであろうルーミアに撃  
ち放った

魔力を抑えたと言っても其れなりの威力が有り、迫り来る弾幕を掻  
き消しながら、その

砲撃はルーミアに直撃した

「きゃあああああああ！！！」その悲鳴と共に辺りを覆ってい  
た暗闇が徐々に  
晴れていった

暗闇が全部晴れると、俺は空へ上がり落ちてくるルーミアを抱きか  
かえ地上に降りる

少しして、意識を折り戻したルーミアは何故か少し顔が赤い

「な、何で？私はお兄さんを食べようとしたんだよ？其れなのにど  
うして……」

「何でって行ってもなあ、襲ってきたと言っても吹き飛ばしたの  
俺だしな？」

そのまま放置して訳にも行かないからな、あと女の子だし「俺は、  
近くの木の根元にルーミアをそっと

置くと、ポーチから有るものを取り出した

「ほれ、お腹空いてるんだろ？干し肉で良かったら少し分けてやるよ」

「あ、ありがとう………モグツムグ！お、美味しい！……普通の干し肉と少し違う？」

「ああ、中々いけるだろ？」少しお腹が膨れたのか、さっきよりも満足な顔付きだ

「さて、そろそろ行くかな」俺は、湖のある方角に向かって飛ぼうとする

「もう行っちゃうの？」

「ああ、さっき言った、二人を探してるって言ったろ？少し急がないと、また紅い霧が

出て来ちまうからな。あれ出てくると色々面倒だからな？夜の内に原因も突き止めないと行けないからな？」

「お兄さん普段何処に居るの？」

「人里だ。里の外れで商売しながら過してるから、陽のある内にでも訪ねてきな」

俺は「じゃ、またな」と言い残し、その場を後にした

さっきの戦闘で動けなくなった私は、樹の根元に座りながら湖の方  
向見ながら

「行っちゃった……何か面白いお兄さんだったなあ〜今度遊  
びに行こう」と

さてと、少し休もうかなあ〜、数日したら、久々に人里に遊びに行  
こうかな

うん、偶には悪くないかもね……

そうして私は眠りに付いた……  
……  
……

……  
……  
……

……

……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9956/>

---

東方錬術録

2010年12月25日09時54分発行